

「恐怖と救済」 - 中世人の生と死 -

—— 平成3年度 特別展の開催にあたって ——

館長 橋本 泰夫

岡山県立博物館では、今年度特別展「恐怖と救済-中世人の生と死-」を、10月12日から11月10日まで、開催することになりました。

すべての人に確実に、また平等に訪れる死。人々は死を恐れ、怯え、悲しむ。人は死んだらどうなるのか。それは、いつの世でも、生きている人々にとって最大の関心事でありました。この人間にとって避けることのできない死をめぐって、さまざまな信仰が生まれることにもなりました。本展覧会では、古代から近世にかけての人々の、死後の世界への恐怖とそれに対する救い、信仰の問題、言葉をかえれば、地獄と極楽をとりあげます。

現代の日本人は、死後の世界をどのように考えているのでしょうか。現在の生が全てであり、死によって全ては終わる、多くの人々がこう考えています。しかし、ごく最近まで、私たちは、どうしようもない死の訪れの前で、救い、すなわち、永遠の生を求めて、死後の世界を強く意識してまいりました。

古くは「古事記」にみられるように、「^{よみのくに}黄泉国」、「^根の国」といった、現世の近い所で、来世が成り立っているように考えていました。死は生の延長線上にあり、そこは暗く、臭気に満ちた穢き国と見ていたように思われます。

6世紀の半ばごろの仏教の伝来は、わが国に、地獄、極楽の来世観をもたらしました。しかし、以前から日本人が抱いていた来世観と仏教の来世観とは、容易には融合せず、地獄、極楽の思想が鮮明になるのは、天台宗の僧源信(942~1017)が永観3年(985)に、「往生要集」を著してからといわれています。このなかで、六道の一つとして描写される地獄の世界、生前の悪業が裁かれ、八大地獄で受ける果てしない、そして想像を絶する責め苦など、「阿鼻叫喚」の世界、これに対して描かれる、苦悩のない、喜びと精神的な楽しみに満ちた極楽の世界はどのように人々に受け入れられたのでしょうか。「往生要集」が著された10世紀の終わりごろ、釈迦の没後二千年を経ると、仏法が滅び、末法の世が来るという末法思想が流行し、日本では1052年から末法の世に入ると考えられていました。この時

代は、武士の勢力が台頭し、律令国家の仕組みがゆるんで、摂関政治から院政へ政権が移動する時期にあたり、山門・寺門間の抗争など、政治、社会の変動に加え、疫病の流行、旱魃や飢饉、地震・火災が相次いで、人々の不安はいやが上にも高まりました。このような現実のなかでこそ、救いようのない現世を穢土と感じ、そこから逃れることを説き、来世の極楽に永遠の安楽を勧める、地獄・極楽の思想は人々の心の底に深く浸透していったのでしょう。それは以後の日本人の道徳・倫理観の形成に大きく係わり、わが国の精神文化形成に大きな影響を及ぼしています。

科学技術が高度に発展し、物質文明の繁栄する現代社会では、「地獄・極楽」という言葉はもはや比喩の言葉としてしか残されていないように思われます。しかし、世紀末の混沌とした社会情勢のなかで、今一度この言葉に思いを馳せるのも意味のないことではないと思われま

す。終わりにになりましたが、今回の展覧会への出品を快く御承諾下さいました所蔵者の方々をはじめ、御協力を賜りました皆様に心から御礼申し上げます。



重要文化財 遊行上人絵巻 巻第二

広島県 常称寺蔵

平成3年度 特別展

「恐怖と救済」

中世人の生と死

10. 12~11. 10

物質文明と言われる現代においてもなお、葬儀は人生最後の儀式であり、墓参・先祖供養の行事も受け継がれています。地獄・極楽を語り、民衆の生活と深く係わり始めた中世の仏教は、現代人の生活や心とどこかでつながっていないでしょうか？

今年度特別展は「恐怖と救済」と題し、日本人が「生」と「死」をめぐって想い描いてきた「恐怖」と「救済」、さらにいえば、「地獄」と「極楽」の思想の系譜を追ってみようと企画しました。

展覧会は「往生要集と地獄・極楽」「現世と来世—浄土信仰」「往生極楽の約束」「日本人と来世観」の四部から構成します。

往生要集と地獄・極楽

自分の為した行いが現世・来世を問わず、必ずその身に報いとして返って来る、という考え方はかなり早くから定着していたようです。日本最古の仏教説話集として知られる「日本霊異記」（9世紀成立）には「善悪の報は影の形に随ふがごとし。苦楽の響きは谷の声に應ふるがごとし。」と、悪行の結果として堕ちて行く地獄を述べています。

けれども六道を輪廻することや地獄に堕ちることの苦しみを徹底して延べ、極楽に生まれることの楽しさを強調し、



重要文化財 十王図より 神奈川県立博物館蔵

ひいては極楽に生まれる為の手段として念仏こそ大切であると、様々な經典や解説書から要文をひいて示したのが『往生要集』でした。

『往生要集』の撰者源信(942-1017)は、天台教学に通じた碩学で、『往生要集』はいわば、当時一級の知識人の著述と



重要文化財

備中倉敷安養寺裏山経塚出土品のうち

図像瓦（阿弥陀如来）

倉敷市 安養寺蔵

いえます。

この極楽往生への指南書は、後世の文学・美術・仏教に大きな影響を与えました。来迎図や来迎会は、源信の考案によるものともいわれています。また江戸時代には、「地獄物語」「六道物語」「極楽物語」からなる三巻物の『和文絵入 往生要集』（版本）として、たびたび復刻・重版されました。多くの挿絵と平易な和文体の文章によるこれらの版本は、勧善懲悪教化絵本として流布しました。いささか芝居じみたユーモラスな地獄の鬼の姿などが、江戸時代の大衆の趣味をうかがわせました。

今回展示する『往生要集』は、写本最古の長徳2年本（石川県聖徳寺蔵 重要文化財）、江戸時代の絵入り和文の版本などです。また、源信ゆかりの滋賀県聖衆来迎寺の『六道絵』（国宝）、地獄の十人の裁判官を描いた『十王像』（岡山県宝福寺蔵・神奈川県立博物館蔵、いずれも重要文化財）などをはじめ、貴重な文化財を紹介します。

現世と来世—浄土信仰

末法の世とは、人がどんなに修業を積んでも悟りを得ることのできないとされた時代で、わが国では、ひろく永承7年(1052)が末法第一年とされました。折しも、荘園制の崩壊と各地での争乱、延暦寺・興福寺などの僧徒の武装化と強硬な振舞い、さらに自然災害の頻発など、社会には末法の世の到来を実感させる状況がありました。このような中、經典類などを地中に埋める経塚が造営され、写経の功德を強調する法華経が盛んに書写されました。

また、臨終の時に来迎する阿弥陀如来とその国土である西方極楽浄土に対する信仰は、末法の世にふさわしいものとして高まりました。

ここでは、倉敷市安養寺裏山の経塚からた瓦経や図像瓦（重要文化財）や、山陽町千光寺の紺紙金字法華經（県指定重文）、奈良県瀧上寺の九品来迎図（重要文化財）など、末法時代と浄土信仰を考えるうえに貴重な資料を展示します。

往生極楽の約束

経塚の造営・写経・仏画の寄進などはいずれも大きな功德に結び付く行いであっても、誰にでもできることではなかったでしょう。大多数の人々はそれだけの財力も仏教に

対する知識も持ちませんでした。大衆にまで広く往生極楽の約束を確信せしめ、受け入れられてゆく諸宗が、鎌倉時代初頭から現れてきます。

法然は、美作国稲岡庄（久米郡）に生まれました。浄土宗を開き、末法の世に生きる凡愚の人間が極楽浄土に往生を遂げるには、ただ一心に阿弥陀の名を称えること（専修念仏）、これが仏の心になかったことであると説きました。「法然上人行状絵巻」（当麻寺奥院蔵、重要文化財）のなかでは遊女や武士といった人々も念仏によって往生を遂げたことが述べられています。

広く民衆の心をつかんだ浄土宗は、法然以後、多くの宗派に分かれました。たとえば、浄土真宗の祖親鸞もまた、法然門下であり、その教えを発展させた一人といえます。

また一遍は、時宗の祖、伊予国（愛媛県）の人。「南無阿弥陀仏」と書いたお札を配りながら、各地を巡歴しました。その行程は、岩手県から鹿児島県にわたっています。鉦を打ち、念仏を唱えながら踊る踊念仏を各地で行いましたが、これが一般民衆にも広まり、盆踊りなどの念仏踊りとなったと言われます。

今展覧会については、鎌倉新仏教開祖のうち、法然と一遍を中心に展示を構成しました。時宗総本山である藤沢市遊行寺所蔵の、「安食問答」（重要文化財）・鉦鼓・阿弥衣など遊行活動に関する貴重な資料も展示します。

日本人と来世観



県重文 木造 地藏菩薩立像 総社市 国分寺蔵

江戸時代にはいつての寺院は、寺請制度によって中央集権体制に組み込まれました。そして人々と寺院は、檀家・檀那寺という強いつながりを持つようになりました。

中世以来、来世の救済と同時に現世の利益も強調された地藏菩薩への信仰や、十三回忌、盂蘭盆会の慣習などはすでに民衆に広く浸透してしま



木造 閻魔庁像より 釜ゆで火の車

玉野市 正蔵院蔵

たが、お盆に僧侶が檀家をまわって先祖供養の経をあげる棚経や、庶民が葬儀を行い石塔を立てることは、寺檀制度が確立した江戸時代に一般的となりました。

また、地獄極楽図や十王図を懸けての絵解きがあちこちで行われ、「地獄極楽」はこの世の戒めとして、説教されました。このような勧善懲悪の啓蒙を通じて、「地獄」「極楽」のイメージは、ますます日本人に共通のものとなってきたと思われま

す。ここでは、小野篁の地獄往來の伝説で知られる六道珍皇寺の祖霊迎への行事を描いた「六道珍皇寺参詣曼荼羅」、同じく六道珍皇寺所蔵の「観心十界曼荼羅」などの中世の資料と、絵解きに使われた「地獄極楽図」（大分県長安寺蔵）や、閻魔堂に安置された一群の木彫像など近世の親しみやすい資料を展示します。



十三仏図
津山市
安養寺蔵

主な展示資料

- 国 宝
- ◎重要文化財
- 県指定（重要）文化財

名 称	所 蔵 者
○絹本着色 源信像	聖衆来迎寺(滋賀県)
◎往生要集 中 写本 長徳2年書写	聖徳寺(石川県)
往生要集 版本(建長5年)	龍谷大学図書館
●絹本着色 六道絵のうち	聖衆来迎寺(滋賀県)
・餓鬼道飢渴苦之図	
・天道歡樂五衰相之図	
・殺父業因念仏功力之図	
絹本着色 六道絵のうち(江戸時代 模本)	聖衆来迎寺(滋賀県)
・等活地獄殺生者罪科之図	
・黒繩地獄殺生偷盜者罪科之図	
・衆合地獄殺生偷盜邪淫罪科之図	
・無間地獄四重五逆者罪科之図	
・人道九不淨相之図	
・人道山海空市無常相之図	
◎絹本着色 閻魔天曼荼羅図	京都国立博物館
◎絹本着色 十王図	神奈川県立博物館
◎絹本着色 十王像	宝福寺(総社市)
◎絹本着色 地藏菩薩像	宝福寺(総社市)
絹本着色 十王像・地藏菩薩像	正楽寺(備前市)
◎絹本着色 阿弥陀聖衆来迎図	松尾寺(奈良県)
◎絹本着色 九品来迎図のうち	瀧上寺(奈良県)
・上品中生・下品中生	
◎絹本着色 阿弥陀二十五菩薩来迎図	遍明院(邑久郡牛窓町)
絹本着色 山越阿弥陀三尊図	浄土寺(赤磐郡赤坂町)
○木造 阿弥陀如来立像	誕生寺(久米郡久米南町)
○行道面	吉備津神社(岡山市)
練供養 面・他一式	弘法寺(邑久郡牛窓町)
◎備中倉敷安養寺裏山経塚出土品のうち 安養寺(倉敷市)	
・図像瓦 3枚(薬師如来・不空成就如来・阿弥陀如来)	
・土製塔婆型題箋 5本	
・瓦経 2枚(法華経)	
◎銅板法華経のうち 序品第一の1	長安寺(大分県)
◎銅管板のうち	長安寺(大分県)
・線刻馬頭観音像 / 不空絹索観音像	
・線刻如意輪観音像	
○銅板法華経	妙覚寺(御津郡御津町)
経筒	吉備津彦神社(岡山市)
装飾法華経普門品	無量寿院(岡山市)
○紺紙金字 法華経	千光寺(赤磐郡山陽町)
柿 経 (福岡市井相田C遺跡出土) 福岡市教育委員会	
◎絹本着色 地藏十王像	日光寺(笠岡市)

紙本着色 地藏菩薩靈驗記	東京国立博物館
○木造 地藏菩薩立像	国分寺(総社市)
◎絹本着色 地藏菩薩像	捧澤寺(小田郡矢掛町)
○鰐口	個人(山口県)
鉦鼓	仏教寺(久米郡久米南町)
◎法然上人七ヶ条制法	二尊院(京都府)
◎紙本着色 法然上人行状絵巻のうち	
・巻第7, 26, 34	當麻寺奥院(奈良県)
紙本着色 法然上人伝法絵 断簡	岡山県立博物館
紙本着色 拾遺古徳伝 断簡	岡山県立博物館
紙本着色 一遍上人像	神奈川県立博物館
◎絹本着色 二河白道図	奈良国立博物館
◎安食問答	清浄光寺(神奈川県)
◎一期不断念仏結番	清浄光寺(神奈川県)
阿弥衣	西郷寺(広島県)
十二光箱(複製)	清浄光寺(神奈川県)
◎紙本白描 遊行上人絵巻のうち	常称寺(広島県)
・巻第2	
○紙本着色 魔仏一如絵詞	日本大学総合図書館
◎絹本着色 施餓鬼図	菓仙寺(兵庫県)
絹本着色 十三仏図	安養寺(津山市)
紙本着色 珍皇寺参詣曼荼羅	六道珍皇寺(京都府)
紙本着色 冥途の旅絵巻	真備町公民館(吉備郡)
紙本着色 盆会招霊図巻	兵庫県立歴史博物館
紙本版画着色 五趣生死輪	兵庫県立歴史博物館
和文絵入 往生要集 版本(天保14年版)龍谷大学図書館	
紙本着色 観心十界曼荼羅	六道珍皇寺(京都府)
○熊野比丘尼関係資料	個人(岡山県)
紙本着色 地獄・極楽図	長安寺(大分県)
木造 閻魔庁像	観音寺(英田郡作東町)
木造 閻魔庁像	正蔵院(玉野市)

※ なお、展示資料の一部については、期間中の入れ替えがあります。

記念講演会

日時：10月19日(土) 13:30~15:30

場所：岡山県立博物館講堂

講師：奈良教育大学教授 赤井達郎 氏

演題：「地獄・極楽の絵解き」

岡山県立博物館だより No.37

発行日 平成3年10月1日

発行者 岡山県立博物館

館長 橋本泰夫

岡山市後楽園1-5

☎(岡山)72-1149